

平成28年9月17日(土)18日(日)

札幌市産業振興センター

「第二回 学力研&北フェス合同研修会 in 札幌 まとめ」

学力研常任委員 竹田 有希

札幌にて、二日間に渡り、学力研と北フェスの合同研修会が行われた。『すべての子が生き生きと学べる教室に』をテーマに、一日目は『基礎学力保障に、この一手!』、二日目は『インクルーシブ教育時代の授業づくり・学級づくり』についての講座が開かれ学びを深めた。

両日とも、課題の共有(チェックイン)から始まり、考えたことを共有するグループワークで締められた。「学力とは何か?」「学力をつけるために何をしてきたか?」「インクルーシブ教育とは?」「今日、学びたいことは?」など、問われると、自分の中ではっきりしていなかったり、迷ったりと、わかっている自分、あいまいな自分にも気づかされる時間だった。また、共有の時間では、話し合うことで、自分の考えが整理されたり、新たな発見があったりと

面白い時間だった。それも、北海道の先生方が、本当に真摯に学んでおられ、あたたかく迎えてくださったからだと思う。学力研の講座にはあまりない形だが、学びも深まり、本当によい時間になったと思う。

十七日『基礎学力保障に、この一手!』

一日、各先生方の講座を終え、最後にグループワークにより、『基礎学力保障にこの一手』ではなく、『三手』を考えた。各グループの三手は、次の通りである。

- A① 反復・繰り返し
- ② 授業づくり 一斉授業での
- ③ 子どもにつける力の明確化
- B① 安心・安全
- ② 変容・成長を価値づけするための準備
- ③ 成長を認め合う関係性づくり
- C① 聞く力を育てる

- ② ゴールイメージをもつ
- ③ チーム・学校で動く

D① 教えることをためらわない

- ② 学力回復の五原則

(シンプルなお話を繰り返し)

- ③ 幹を太くするために、何を教えるべきか、しっかりと見極めること

E① 書くこと(自分の考えを明確に)

- ② 聴く(豊かに)
- ③ 言葉育てる

F① 見通し

- ② 学力をつけるとともに人の心を育てる
- ③ 見えない学力こそ学校で

基礎学力を保障していくには、教育における不易の部分がやはり大切になる。「ゆとり教育」や「アクティブラーニング」が提唱されると、前のものの全面否定になりつつあるが、やはり「読み・書き・計算」を徹底して鍛えていくことは大切だと改めて感じた。繰り返し行っていくことで、脳を鍛え、他の学習に耐えうる脳に鍛えていく。学力研で大切にされてきたことが、頭に残った。今回の講座を通して、目の前にいる子どもたちがどのような力を身に付けてお

り、どの段階にいるのかを把握し、どのよう
な取り組みを行っていくことで、どんな
子にしていくのか見通しをもっておくこと
が大切だと感じた。また、聞き方を指導す
るときも、聞きかたに終わらずに、「人を大
切にする」ということをねらいとし、心を
育てていくことも意識していきたい。教師
が何をねらいとして指導しているかによっ
て子どもたちの姿も変わる。

一八日『インクルーシブ教育時代の授業作

り・学級経営』

『インクルーシブ教育』ときくと、特別
な支援を必要とする児童生徒にどんな配慮
をしていくのか？というイメージをもつて
いた。しかし、今回の講座をきっかけに、
いろいろな新たな視点で考えることができ
た。

「どきりっ」としたのは、は、宇野先生
の「教師の対応が教室の世論になる」とい
うことだ。子どもは、教師がどう対応する
のか見ている。困り感のある子は、排除さ
れやすい子にもなりやすい。「はやくしな
さい」という、教師の言葉を、周りの子も同

じ口調で言ってしまったていないか？その子
が一人の人間として対応できるようにする
ことが大切である。排除されない土壌づく
りを行うことが大切だ。姿勢やあいさつ、
時間などしっかりと指示に従わせる、して
はいけないことの枠を示す、そして、楽し
いことも共有し信頼へ。肯定的な声かけや、
人物観を変えていく。人物観を変えていく
とは、例えば、「かわりもの」を「おもしろ
い」に変えていくような。教師の意識、対
応をもつと考えていかななくてはと感じた。

そして、何度聞いても、新鮮な気持ちに
させてくれる視点は、「心地よさ」という視
点だ。岡先生、荒井先生、岸本先生のお話
しには、共通して「心地よさ」があつたの
ではないかと思う。

岡先生は、なわとび、連絡帳を丁寧に書
く、という一つのことをコツコツと練習す
ることで達成感を感じさせるという取り組
みを紹介された。コツコツと取り組んでい
くことは、教師も根気がいることだが、子
どもの自信となり、自我も育てることにつ
ながる。また、音読、黒板ふきなどの「リ
ズム」による心地よさだ。説明、説得では

なく、心地よさが子どもを動かす。

荒井先生は、「全員参加」「個を鍛える」
「集団を鍛える」「知を深める」「自立への
道」という五つの心構えという視点から、
授業作りを提案された。全員が参加できる
ような発問、そして、同じようなパターン
を繰り返すことで、テンポもよく、「次は先
生は、これをきくだろうな」と子どもも予
測し、次の発問に向けての準備ができるの
で安心感を得ることができると。さらに、教
科書から一步広げて、「知を深める」ことで、
子どもの知りたいという気持ちを心地よ
くしているのではないだろうか。

岸本先生は、「合理的な配慮」心地よさを
感じる」と提起された。そのためには、子
どもを観察・分析すること。描画から、授
業の様子からなど。そして、その子にあつ
た合理的配慮を。多動性のある子なら、算
数の公式を立てて音読するなどの体を動か
す授業の組み立て。手のつぼ押し等の落ち
着くためのグッズを与えてみる。

「心地よさ」の視点で考えると、教師も
ワクワクしてくるような気がする。やり方
をいろいろと考えてみたいと思う。